

「大山寺僧坊跡観察会」を開きました！

大山寺に、古い時代の寺院跡（僧坊跡）がたくさんあることをご存じですか？ 広報3月号でもお知らせしましたが、町内でも知っておられない方が多くあります。

そこで、もっとみなさんに大山寺僧坊跡についてもっと知っていただこうと、4月26日（日）に「大山寺僧坊跡観察会」（社会教育課主催）を開きました。観察会には町内外から約30人の参加がありました。



▲担当者が絵図資料で説明（「大山参道ギャラリー」にて）

観察会では、普段はめったに歩くことのない旧横手道や寂靜山内の僧坊跡群を、調査成果などを交えながらご案内する予定でしたが、あいにくの悪天候で大幅に内容変更し、参道ギャラリー内の絵図資料による説明、霊宝閣での収蔵品の鑑賞、昼食会場でもある宿坊「山菜荘」（大山寺の子院『観證院』でもあります）では、住職の清水豪賢さんから大山寺のたどった歩みなどをお話していただきました。

その後、参加者みんなで山菜を使った精進料理をおいしくいただきました。

今回は実際に僧坊跡群を歩いて観察することはできませんでしたが「ぜひ、再度企画してほしい」といった要望もいただきました。社会教育課では、今後も大山寺僧坊跡についての観察会などを計画していきます。ぜひご参加をお願いします。



東照権現社跡へ登る階段

大山寺今昔 ワンポイント講座（一）

～絵図から歴史を読む その一～

大山僧坊全域を描いた絵図は、江戸中期末の寛政九（二七九七）年に片山楊谷によって描かれたもの、江戸後期の堀田里席によって写されたもの、明治三（一八七〇）年に雲城によって描かれたものがよく知られています。片山楊谷と堀田里席の絵図には、大日堂（現在の大山寺本堂）の裏に鳥居があり、その奥に東照権現社を祀った様子が描かれています。今回は、徳川家康を祀る東照権現社がなぜ大山寺に建てられたのか、ということについて考えてみます。

関ヶ原の合戦（一六〇〇年）の後、中村氏が伯耆を支配するために米子城に入り、大山寺からその領地の多くを削りとりました。これに対して大山寺の豪門僧正が、江戸幕府に寺領安堵（寺の領地として保障すること）を願い出しました。その結果、慶長十五（一六〇九）年によく「大山寺領三〇〇石」が安堵され、大山寺再興が果たされることとなりました。このような経緯もあり、大山寺山内に

なりました。こうして大日堂（中門院谷の中心となる堂）の奥に東照権現社が祀られることになったようです。ところが、明治三年の絵図にはこの東照権現社は描かれていません。これはおそらく、幕府から明治政府へと移った際、全国的に家康を祀る東照権現社は廃れ、明治政府の神仏分離と廃仏毀釈という政策の流れの中で、大山寺も苦境に陥り、禅林院も東照権現社の維持ができなくなつて、ついには廃社になったと考えられます。

東照権現社が建てられたことも不思議ではありません。元和三（一六一七）年に日光東照宮が創建されると、全国の諸大名が徳川幕府への忠誠を表すためにこぞつて東照権現社を建てるようになり、因幡では慶安三（一六五〇）年に東照宮（現・樗谿神社）が建てられました。しかし、大山寺の東照権現社は寛延二（一七四九）年と、他地域にくらべて実に一〇年以上も遅れて建てられています。これは一体どうしてでしょうか？ 大山寺は宝永七（一七二〇）年に日光宮（日光東照宮）の御掛り寺に決まり、坂本滋賀院から御留守居役と代官が派遣されるようになりますが、このことに理由があります。

滋賀院御留守居役第二世の宝積院範清法印は、退任後に久能山東照宮（家康が最初に葬られた場所）に移っています。さらに第四世の覺樹王院孝源法印の時には、大山寺中門院谷の禅林院に東照権現社を建てさせ、永代別当としてこれを管理させるように

このように、絵図は当時の社会状況を妙実に描き出しており、その歴史を探るヒントを与えてくれます。大山寺も歴史の流れに翻弄され、その姿も刻々と変化していったことを実感させられます。現在も、大山寺本堂横の鐘撞き堂の裏側には、東照権現社へ通じていた階段と社地跡の平坦面が残っており、そこには礎石などの石材が散乱しています。大山寺本堂に行かれたときには、立ち寄ってみられてはいかがでしょうか。

（社会教育課文化財調査班）



大日堂と東照権現社（「伯州角盤山大山寺絵図」より）

【参考文献等】

「大山寺本院西薬院要用雑録」 南波陸人 編著
 【参考絵図】 「伯州角盤山大山寺絵図」（寛政九年・片山楊谷） 山陰歴史館所蔵
 「大山寺領絵図」（明治三年・雲城） 大山寺理観院所蔵